

父のみわぎを行っておられたイエス

ヨハネ福音書10:31-42

【新改訳 2017】

10:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げた。

10:32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」

10:33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「あなたを石打ちにするのは良いわざのためではなく、冒流のためだ。あなたは人間でありながら、自分を神としているからだ。」

10:34 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った。「おまえたちは神々だ」』と書かれていないでしょうか。

10:35 神のことばを受けた人々を神々と呼んだのなら、聖書が廃棄されることはあり得ないのだから、

10:36 『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が聖なる者とし、世に遣わした者について、『神を冒流している』と言うのですか。

10:37 もしわたしが、わたしの父のみわぎを行っていないのなら、わたしを信じてはなりません。

10:38 しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父にすることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」

10:39 そこで、彼らは再びイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手から逃れられた。

10:40 そして、イエスは再びヨルダンの川向こう、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた場所に行き、そこに滞在された。

10:41 多くの人々がイエスのところに来た。彼らは「ヨハネは何もしるしを行わなかったが、この方についてヨハネが話したことはすべて真実であった」と言った。

10:42 そして、その地で多くの人々がイエスを信じた。

【祈りながら考えよう】

(1) ユダヤ人たちがイエスを石打ちにしようとしたのはなぜですか。

(2) 詩篇82篇で「神々」と呼ばれたのはどういう人たちですか。なぜそのように呼ばれたのですか。

(3) 主の言われたことが信じられなくても、主のわざを信用したら結果はどうなりますか。

【解 説】

(1) イエスを石打ちにしようとした

ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げた。(31節)

ユダヤ人たちは、イエスのことばを聞いて、自分が神であられると述べておられたことに気がついた。それで、彼らは「イエスを石打ちに」しようとして、「石を取り上げた」。この冒流を許してはおけないと思ったのである。

ユダヤ人たちの反応は、かつて主が「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』」なのです」と言われた時と全く同じである(ヨハネ8:59)。

彼らは主のことばが冒流に当たると見なし、ステパノの時と同様に自分たちの律法に訴えて、冒流罪にふさわしい刑罰を与えようとした(レビ24:14-16)。「主を冒流する者は、自分の民の間から断ち切られる。……全会衆は宿営の外で、彼を石で打ち殺さなければならない」(民数記15:30、35-36、I 列王記21:13)。

ユダヤ人たちは、ローマ帝国の支配下にあったので、誰をも死刑にする権威を持っていなかった。もし誰かが石打ちにすることがあれば、それは突発的な出来事か私刑(個人や集団が、法律によらずに加える制裁。私的制裁。リンチ)であったはずである。

(2) どのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか

それに対してイエスは、前のようにすぐ彼らの手を逃れるのではなく、彼らに問いかけた。

「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」(32節)

ここで主は、父からメシアとして遣わされた使命を果たすために、ユダヤ人たちの前で公になされた多くの奇蹟に訴えられた。それは誰も誤りを見いだすことのできないすばらしいよいわざであるが、主はそのうちのどのわざで石打ちに値するかと問われた。ユダヤ人たちはしばしば、主がメシアであることのしるしと証拠を求めた。それに答えて主は

多くのしるしを与えられたのである。

彼らは「あなたを石打ちにするのは良いわざのためではなく、冒流のためだ。あなたは人間でありながら、自分を神としているからだ。」(33節)と答えた。

ヨハネ8章46節の場合と同様に、主が確信を持ってユダヤ人たちに問われたので、彼らはどう答えてよいかわからなかった。彼らはキリストになんの悪しきわざをも見いだせなかった。そこでユダヤ人たちは、わざのゆえに主を石打ちにするのではなく、冒流的なことばのゆえであると答えた。その冒流とは彼らによれば「人間にすぎないのに自分を神とし、そのように語ること」であった。

(3) 詩篇82篇6節を引用して答える

イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、「わたしは言った。『おまえたちは神々だ』」と書かれていないでしょうか。(34節)

主イエスはユダヤ人たちに詩篇82篇6節を引用された。主はこの部分を律法の一部と呼ばれた。言い換えれば、彼らが靈感を受けた神のことばと認めていた旧約聖書からの引用であった。

完全に引用するとうなる。「わたしは言った。『おまえたちは神々だ。みないと高き者の子らだ。』」(詩篇82:6)

神のことばを受けた人々を神々と呼んだのなら、聖書が廃棄されることはあり得ないのだから、『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が聖なる者とし、世に遣わした者について、『神を冒流している』と言うのですか。(35-36節)

主は詩篇から、「神のことばを受けた人々」を「神々」と言い表わされていることを示された。それらの人々は民をさばく時に神の代理となっていた。神は彼らを通してイスラエルの民に語られた。

ここで、主は、「聖書が廃棄されることはあり得ないのだから」と言われ、旧約聖書が靈感を受けたものであり、廃棄されることはあり得ない書物であると言われた。

その旧約聖書で「さばきつかさたち」を神々と呼ばれているのに、永遠の昔から「父」なる神に聖別され、(御父といつも共にいて)天から「世に遣わされた者であるイエス」がご自分を「神の子」であると主張できるのは当然ではないか。決して冒流などではない。

(4) わたしのわざを信じなさい

もしわたしが、わたしの父のみわぎを行っていないのなら、わたしを信じてはなりません。しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父に

いることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」(37-38節)
神から遣わされたことの証拠として、救い主は、ご自身が行った奇蹟の数々に改めて訴えた。「わたしの父のみわぎ」という表現に留意したい。奇蹟自体は神であることの証拠にはならない。聖書を読むと、悪霊も時として奇蹟を行う、と書かれている。しかし、主の奇蹟は「父のみわぎ」であった。そのもろもろの奇蹟は二重の意味で主がメシアであることを証明していた。

第1に、それらの奇蹟はメシヤが行う、と旧約聖書が予告していたものであった。イザヤ35章を始め他の預言書も、メシアは不治の病を治し、目の見えない者の目を開け、ツァラアトに冒された者を清め、耳の聞こえない者の耳を開き、口のきけない者の舌を解き、悪霊を追い出し、死者を生き返らせるお方であると預言している。

第2に、それらは恵みとあわれみの奇蹟、人類を益するわざであって、悪霊が行えるような類いのものではなかった、という点である。それでも彼らは信じなかった。

(5) ヨルダン川の向こうに逃れる

そこで、彼らは再びイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手から逃れられた。そして、イエスは再びヨルダンの川向こう、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた場所に行き、そこに滞在された。(39-40節)

主イエスがそれまでの主張を撤回するどころか、かえって強調しておられることに、またしてもユダヤ人たちは気がついた。そこで、彼らは再度主を捕らえようとしたが、主はまたもや、彼らの手を難なく逃れた。主がご自身を彼らの手に渡される時は今や遠い先のことではなかったが、まだ主の時は到来していなかったのである。

主は、エルサレムを一時離れて、ヨルダン川の向こう側のペレヤ地方に退いたのである。主の3年にわたる驚くべきことばとわざも終わりを告げようとしていた。

(6) その地で多くの人々がイエスを信じた

多くの人々がイエスのところに来た。彼らは「ヨハネは何もしるしを行わなかったが、この方についてヨハネが話したことはすべて真実であった」と言った。そして、その地で多くの人々がイエスを信じた。(41-42節)

イエスのところに来た人々は、バプテスマのヨハネが主イエスについて言ったことを聞いていた。バプテスマのヨハネはすばらしい奇蹟を行うことはなかったが、その証しがすべて真実であったと、イエスを信じるに至った。

